

令和4年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立別所小学校
-----	-----------

1 学校教育目標

人間性豊かで 主体的に学ぶ子の育成 — 確かな学力 豊かな心 健やかな体 —

2 本年度の重点目標

- (1) 学習内容や指導方法に工夫・改善があり、児童の能力・個性を伸ばすことができる明るく活気のある学校をつくる。
- (2) 教育環境の整備や道徳・人権教育の深化により安全で安心して学べる温かい学校をつくる。
- (3) 保護者・地域との連携により教育効果を高め、保護者・地域の願いに応える信頼される学校をつくる。

3 自己評価結果(達成状況)【A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	<ul style="list-style-type: none"> 学習規律の確立と徹底 基礎学力向上のための指導方法の工夫・改善(国・算の基礎学タイム) ICTを有効活用した授業の推進と充実 読書活動の充実 小中一貫教育の推進 	<ul style="list-style-type: none"> 毎朝「別所っ子学習7か条」、「話し方聞き方レベル表」を意識させる取組で、落ち着いた学習態度で授業に臨めた。 国語科、算数科の授業の初めに、児童が頃取りしやすい時間や内容を工夫しながら全学年がリテストや反復練習をして基礎学力の定着を図り、学力向上に繋げた。 効果的なICT活用を交流したり、全児童の学習の成果をたんぽぽホールに掲示したりする場を設けることで、発達段階に応じた指導方法の工夫や改善を行った。 改訂版「読書貯金通帳」を持たせたり、地域の方による読み聞かせを再開したりして読書活動を推進した。時間を見つけて読書する様子が見られたが、休み時間の図書室の利用は少なく、保護者への啓発の必要性も感じた。 6年生を中心に中学校と連絡を取り合い、異年齢活動の合同開催や、文化祭の見学など中学校と連携した取組を試みた。小中合同研修会、teams活用の会議で、教科ごとに小中一貫カリキュラムを作成し、小中一貫教育を推進した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学習規律のさらなる確立に向け、生活指導とも連携をしながら全学年共通で指導する。また、「別所っ子7か条」や「話し方聞き方レベル表」を活かした取組を交流する。 引き続き、反復練習やAIドリル活用など基礎学力の定着を図る取組を続ける。 ICTの有効活用に向けて、教職員のスキルアップを図りながら、個別最適な学びを展開できる授業づくりに努める。また、効果的なICT活用の授業を積極的に公開する。 年度初めからスムーズに読書活動が進められるよう、年度末に改善点を把握する。また、長期休みに親子読書を推進するなど、家庭と連携した読書活動をめざす。 中学校と連携して、児童生徒の交流事業を計画したり、小中一貫カリキュラムの活用を図ったりする。
生徒指導	<ul style="list-style-type: none"> 生活ふりかえりカード等を活用した基本的な生活習慣の見直しと定着 組織的指導を基盤とした、いじめ・不登校・その他問題行動等の未然防止・早期発見・早期対応・早期解決 情報安全・情報モラルカリキュラムの作成と各学年に応じた指導の充実 よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 毎月、生活目標を設定して朝会で呼びかけたり、長期休み後に生活ふりかえりカードを活用したりして、基本的な生活習慣を意識させた。しかし、家庭での情報端末を使う時間が長い児童や、就寝時間から遅い児童が多く見られた。 教職員で速やかに共通理解した内容を各クラスで指導して、「予防する生活指導」に努めた。また、学期一度生活アンケートを実施して、いじめの早期発見に努めた。しかし、不登校児童、不登校傾向児童が徐々に増えているため、各家庭や関係機関、スクールカウンセラーと連携を図った。 担当が中心となり適切な教材を勧め、各学年、情報モラルの授業を行った。 毎朝、児童会のあいさつ運動や教師のあいさつ当番を実施することで、あいさつをする児童が増えた。また、休み時間は外で遊ぶよう声掛けを、積極的に外で遊ぶよう促した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 「別所っ子よいこのきまり」を、4月当初だけではなく定期的に振り返る。また、配布したりメール連絡したりして、保護者へ啓発する。 引き続き教職員が一体となつての生活指導を行い、未然防止へとつなぐ。不登校については、家庭やスクールカウンセラー、関係機関と連絡を密に取る。 情報モラルの各学年系統立てたカリキュラムを検討する。また、児童会が中心となりタブレット等の使い方を啓発する。 引き続き、あいさつ当番や休み時間の見守りなどを行い、日ごろから相談しやすい雰囲気づくりに努める。
道徳・人権教育	<ul style="list-style-type: none"> 道徳の時間における道徳的実践力の育成と評価の工夫 他者意識や自尊感情を育む道徳実践の向上 児童一人一人が大切にされる学級経営や特別活動の実施 家庭・地域と連携した人権教育の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 道徳の時間に、身近なことを想起させたり、自分自身について振り返らせたりすることで、実際の生活に活かそうとする意欲を育てるとともに、学年に応じた評価方法を実践した。 全ての授業、終わりの会、通言などあらゆる機会に、自分自身や友だちのよいところを具体的に伝え合うことで、自尊感情を育むことができた。 異年齢活動では、高学年がリーダーシップを発揮することで互いに信頼し合える仲間づくりができた。ありがとうワークを設定し、有志で創り上げる人権劇を教材として人権教育を行い、全児童の人権意識を高めることができた。 講師招聘研修で人権問題や指導の工夫等についても考え、親子で学び合える人権学習を展開したことで、お互いを認め合い、自分や他者をも大切にすることを育んだ。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 自分事として考えられる授業づくりにさらに推進する。 様々な体験活動を通して、他者意識や自尊感情を育む。 豊かな人間関係を築くために、道徳や人権教育を基盤とした学級経営を行う。 今後も、親子人権学習などで地域や保護者の願いに寄り添い、保護者の人権に対する考え方などを把握しながら実践を積み上げ、次年度に修正すべき点を引き継いでいく。
特別支援教育	<ul style="list-style-type: none"> 校内支援委員会における校内支援体制・支援方法の充実 関係機関と連携した指導の充実 特別支援教育への理解、啓発の推進 幼・園・小・中連携教育の推進 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度に引き続き、「個別の支援計画・指導計画」を作成し、個々の特性に配慮した支援・指導を模索するとともに、目標を明確にして指導にあたることができた。 個別の配慮が必要なケースに対して、関係機関と連携したケース会議の開催により、支援体制・方法の充実を図った。 教職員に対しての研修を実施し、学習の構造化について、本校の実態と照らし合わせて研修を行った。また、各学年の発達段階に応じて理解教育を実施した。 幼・園・小・特別支援学校との各種連絡会議等において、情報交換や必要に応じた観察を行い、入学後の支援に活かした。医療的ケア安全委員会を設置し、園や保護者と情報交換を行いながら次年度に向けての連携を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 個別に設定された目標を特別支援教育指導補助員と教職員が共通理解する場を持ち、目標に対しての支援の方法について、共通理解を図る。 個別の配慮が必要な児童に対して、計画的にケース会議を開き、継続した支援を行う。 様々な児童に対して目を向け、多様な視点から児童を見守れるよう、全教職員が各学級を見て回り、児童への理解教育推進を図る。 小学校と中学校との違いについて、夏の研修会や中学校との引継ぎで確認し、9年間を見据えた支援の在り方を意識して、目標設定や指導にあたる。
安全・防災教育	<ul style="list-style-type: none"> 自ら身を守り、安全を確保する能力の育成 発達段階に応じた防災教育の推進 地域と連携した安全確保 	<ul style="list-style-type: none"> 早い時期に交通安全教室を行い、安全な登下校ができるように取り組んだり、引き渡し訓練、地震避難訓練を実施したりした。 学年に応じた教材を使って防災学習を行い、訓練に活かした。 メール連絡を通して、人の目の垣根隊や保護者と情報共有した。また、月に一回、全教職員が登校指導を行い、人の目の垣根隊と連携して指導した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初の避難経路の確認、学期一度の防災訓練、不審者対応訓練を実施する。また、引き続き児童の安全意識向上に向けて取組を推進する。 年間防災教育計画表を作成し、児童の発達段階に応じて系統だった防災教育に取り組む。 より安全に登下校できるよう人の目の垣根隊や保護者との連携を大切にしながら、安全確保に努める。
家庭地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> 保護者・地域と連携した教育活動の推進 情報安全・情報モラルの啓発 オープンスクール、通信、Webページ等を活用した開かれた学校づくりの推進 保護者との教育相談の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 各学年様々な場面で講師を招いての活動を行い、積極的に地域とのつながりをもった。 情報モラルの学習を全学年で定期的に行った。しかし、タブレット端末の学校での使い方のルールが家庭に浸透していない。 学校行事やPTA行事、地域の行事が縮小されているが、学校における児童や学校の様子をできるだけ通信やホームページで紹介した。 スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、関係機関等と連携し、教育相談の充実を図った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き学習内容に沿った活動を、保護者、地域と共に検討し、企画して取り組む。 情報モラルに関する学習を充実させるとともに、タブレット端末の使い方のルールを各家庭へ啓発していく。 より多くの保護者や地域の方に学校生活を見ていただける行事内容を検討し、開かれた学校づくりをめざす。 スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等と連携し、相談しやすい学校としての取組を継続して行う。
教職員の資質の向上	<ul style="list-style-type: none"> 人権意識の高揚と指導力の向上 校内研修の充実 積極的な研修による教職員のスキルアップ ICT機器を有効活用した授業づくりへの意欲の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 学年の始まりに講師を招聘し、児童一人一人を大切に学級づくりと授業づくりの研修を実施した。また、全学級共通で「まかまか言葉とトゲトゲ言葉」に取り組み、言葉の大切さを確認しながら人権意識を高める指導を行った。 一人一授業の公開を行い、互いの授業力を高めた。また、全職員が積極的に参加できる研修方法を考えたり、講師を招聘した研修を行ったりして、専門性を高めた。また、月に一度、本校職員が講師となり自主研修を行った。また、市の夏季研修を校内研修として受講するなど、積極的なスキルアップを目指すことができた。 全教職員が積極的にタブレットを活用し、技能やツールの共通理解を深めることができた。また、必ずICTを使用した授業を公開したため、さまざまな使用内容・方法を学ぶことができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 次年度も年度初めに講師を招聘し、一人一人を大切に学級づくり・授業づくりを共通理解する研修を設定する。 普段からお互いの授業を見る機会を増やし、一層授業力を高める。また、研究内容に即した講師を招聘する。 具体的な授業計画を立てて、学年やグループでの研究を充実させる。 児童の力を高めるICTの活用を研究する。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

- ・方法は適切であり、改善の方法が具体的に、次年度に活かせるものと期待できる。
- ・取組の状況が具体的にあり、分かりやすい。今後も、自信をもって取組を進めてほしい。
- ・教職員のアンケート項目が、保護者や児童アンケートと合わせた書き方になり、具体的に分かりやすいものに改善された。
- ・全体的に教職員の数値が高く、保護者の数値が教職員より低い傾向にある。中でも、読書に対する項目の意識の差が気になる。教職員の取組は、評価できるものであるため、保護者への啓発をより一層進め、学校の取組を周知していく工夫をするとよい。また、どの評価も適切であると考えている。
- ・学習が楽しいと思える学校づくりをしてほしい。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果および改善の方策の適切さについての評価
<ul style="list-style-type: none"> ・時代背景から読書を推進する難しさがあるだろう。保護者と児童とのコミュニケーションが少なくなっているため、教職員、児童と保護者との間に意識の差が生まっているのではないかと。図書スペースや図書館を活用し、今後も本に触れる機会を意図的に設定して行ってほしい。一方で、タブレット端末を活用し、調べて学ぶことで培われる力もあると考える。成果のある取組を積極的に保護者へ知らせることで、保護者が学習への関心を高めることに繋がるのではないだろうか。取組自体は今の時代に必要な学びを推進しており、A評価が妥当である。今後も、協働的に学習する楽しい学習の場づくりを期待する。 ・不登校児童が増加傾向にあるのが気になる。人手不足もあり、スムーズな対応に課題があるだろうが、関係機関と密に連携をし、ケース会議を頻繁に開催していることなど評価できる。そのため、A評価が妥当である。スクールソーシャルワーカー等と連携して、不登校の要因を分析し、予防する対応を今後もお願いしたい。また、民生委員など、身近な地域との連携も勧める。 ・道徳の授業において自分事として捉えられる授業展開を工夫したり、異年齢活動を活用したりしており、児童の豊かな心の成長に繋がっていると考える。A評価が妥当である。今後も、さらに、外国籍の児童が増加していくであろう。多文化共生担当を中心に、児童の学力保障に努めていただきたい。ありがとうワークは素晴らしい取り組みである。回数を増やすなどして、人権教育だけではなく特別支援教育に結び付ける取組も展開できるのではないかと。 ・個別に対応する児童が増えている中、日々細かい取組をしている点が評価できるため、A評価が妥当である。新しい支援学級が設置されるので、今後も全教職員で共通理解する場を設定し、個に応じた支援をしていただきたい。そして、特別支援教育から、人権教育、多様性を増やす教育に繋げて行ってほしい。 ・地域によって児童数に差があるためか、一人で登校している児童を見かける。地域や保護者と連携をして、できるだけ一人で登下校しない体制づくりをお願いしたい。教師も運動靴をしっかりと履く、笛を携帯するなど、迅速に対応できるようにする。訓練については、回数や内容を計画し、不審者対応訓練など、防災教育も充実させる。安全面に課題が残るため、B評価が妥当である。 ・地域の行事が十分に再開できていないとは言えず、児童との繋がりが薄れているのは残念である。その中でも、文化祭に作品を出展していただくなどありがたい。さらに、学習と関連しながら直接的に関わることができれば嬉しい。保護者のさらなる理解を得ていくために、参観日や懇談会など保護者と顔を合わせる機会を大切にしたい。B評価を妥当とし、地域や保護者とのさらなる連携を目指していただく。 ・ICTの活用を進めており、求められる教育に沿った指導を期待できる。A評価を妥当とするが、得意・不得意によって指導に差が出ないよう、今後も研修など充実させてほしい。